

帝国図書館の構想と実際 - 田中稲城の構想を中心として -

杉泊 直也

帝国図書館は、明治 30 年に設立された戦前期日本の官立の図書館である。帝国図書館の設立には、同館の初代館長であり、日本で初めて図書館に関する学術修行の為に欧米へ留学した田中稲城が深く関わっている。しかしながら、田中稲城が構想した帝国図書館と、実際に設立された帝国図書館との間には、大きな相違が存在する。

よって本研究では、田中稲城の帝国図書館構想と、実際に設立された帝国図書館との相違について調査し、且つその相違が生まれた理由について考察する。これにより、帝国図書館の成立と発展に関する歴史に新たな視野を提供できる事が期待される他、田中稲城の業績についても、再評価する事ができるであろう。

田中稲城の帝国図書館構想は、纏めると以下の 8 点になる。1.行政諸部局の蔵書の内、必須の物以外を帝国図書館の蔵書に合一する事。2.帝国図書館が国政へ奉仕する事。3.予算を増額する事。4.他の官庁にほど近い都心に、新館を建築する事。5.図書館委員制度を制定する事。6.図書館職員の待遇を改善する事。7.図書目録を改善する事。8.夜間開館を実施する事。これらの構想のほぼ全ては、明治 24 年の段階で考えられていた事がわかった。

そして実際の帝国図書館では、7.の図書目録の改善と、8.の夜間開館を除き、ほとんど実現しなかった。特に 4.新館の立地は、田中稲城の構想とはまるで違う上野となり、5.図書館委員制度も全く制定されなかった。1.蔵書の合一は、諸官庁から度々図書が寄贈されるばかりであり、2.の行政奉仕にしても、帝国図書館側はその用意をしていたが、諸官庁は敢えてそれを利用しようとはしなかった。7.の図書目録の改善も、半ばまでは成功したが完成する事はできず、ただ 8.の夜間開館のみ、構想通りに実現する事ができた。

この田中稲城の構想と実際の帝国図書館との相違を詳しく考察したところ、他の諸官庁との渉外が要求される事柄は、悉く実現していない事が明らかとなった。この理由は、畢竟するに、明治政府の帝国図書館に対する無関心であろう。政府内での、帝国図書館の地位は大変低かったのだ。田中稲城は盛んに運動し、政治家達を説得し、帝国図書館を設立する事には成功した。これ自体は快挙と呼ぶべきではあるのだが、その帝国図書館を、欧米の国立図書館の如くしたいという理念を理解してもらうには至らなかった。そして加うるに、内乱、対外戦争と続けざまに戦乱が引き起こる当時の日本の社会情勢が、図書館に対して十分な予算を配分する事を許さなかった。政府内での庇護者を持たない帝国図書館は、如何に高い志を持った館長の下で運営されていようと、軍備を最優先とする帝国主義世界の新興国に在っては、白眼視されざるを得なかったのである。

(指導教員 呑海沙織)